
夢の国のアリス

乃神 夢亜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢の国のアリス

【Nコード】

N4599U

【作者名】

乃神 夢亜

【あらすじ】

「私を狂わせて＊＊＊さん。だって、約束でしょう…？」自分で自分を追い込みすぎた、彼女が見た夢は…？日常を壊された少女アリス。日常を取り戻したいのならば自分の“大切なモノ”を探す必要があると言われる。

入れ替えられた記憶と歪んだ感情。壊れた世界と複雑に絡み合った想いは、彼女に何を与えるのか———？

嫉妬深い白ウサギ、神出鬼没のチェシャ猫、独占欲の強い女王様、常識人のイカレ帽子屋、ツッコミアリス。

一癖も二癖もある登場人物たちが織りなす
ダーク恋愛ファンタジー
！？

妄想少女（前書き）

コレは、不思議の国のアリスを原作に書きました。

…とは、言いつても、かなりおかしいですが。

いるキャラがいなかったり、いないキャラがいたり…

グダグダですが、そこはご容赦を…。

誤字、脱字、言い回しが変…

その他、間違いなどがありましたら

是非、教えてください。訂正します。

時折、番外編をはさもうと思っています。

妄想少女

【不思議の国Ⅱ夢の中の世界】

夢見がちな私が想像した、私だけの世界。
私だけを好いて、私だけが必要とする、そんな世界。
夢の中でだけ、私は安心して生きられる。

コチラの世界とは180度違う。

あの刺さるような怖い視線も感じない。

影でコソコソ悪口を言われることもない。

何を言っても変な目で見られることも無い。

白ウサギはいつも私の側にいて遊び相手をしてくれる。

チェシャ猫はいつの間にか現れてナゾナゾを出して消えていく。

女王は少し怒りっぽいけど優しくとても美人。

帽子屋さんはいつでもお茶会をしていて美味しいお菓子を出してくる。

三月ウサギはいつも騒いで、眠りネズミはいつも眠そう。

『ずっと、ずっと夢の中にいられたら……』

何度そう思っただろう。楽しい世界にいつまでも。
そのまま彼らのように狂ってしまいたい。

でも、夢は醒めるから夢なんだ。それは分かっている。

……何でココに私は居るんだろう？

こんな世界に居たくない。

ココは私には怖すぎる。

もっと、もっと、楽しい世界に。

私を好いてくれる世界に。

私が望まれる世界に。

幸せな幸せな幸せな世界に。

誰が悪かったわけじゃない。

悪かったのは私、そう私が悪いんだ。

だから、ココには居てはいけないんだ。

：なら、別のところなら居てもいいだろうか？

何処か、一つくらい私が居てもいい世界。

——それは、唯一つ、自分が作った世界だけ。

ソレに気づかぬまま私はいつしか彼らを忘れ日常に依存していった。

ソレが、今になって戻ってくるとは思いもしないで。

私とあの子で交わした約束。あの子はまだ覚えているのだろうか？

「私を狂わせて？ ＊＊＊さん——」

『***。今から約束を果たしにいきます』

【現実⇨悪夢】

アリス。一緒に堕ちましょう？

ねえ、アリス？

君を傷つけるだけの世界は必要ないよ。

何時まで、こんな世界にしがみついているの？

君を必要としてくれない世界なら、捨ててしまつて。

僕らはいつでも君の味方だよ。

いつでも君を好いて、

いつでも君を望み、

君を幸せにすると誓うから。

僕らを忘れないで、君も僕らを望んで。

君が僕らを望むのならば扉は開く。

君が望むのならば、何処までも、何処にでも行くよ。

——さあ、コチラにおいでよ。

「……ん？」

風に乗って声がした。「コチラにおいでよ。」と。
空耳なのだろうが、何処か懐かしい台詞。

いつの間にか寝ていたらしく、図書室はすでに日が沈みかけていて、部屋の中を赤く、赤く染め上げていた。

普通なら、先生が注意しに来るであろう時間帯なのに……。

誰もいない、静かな空間に、黒い影が一つ。

そう思うと、悲しいような、安心するような、なんとも言えない気持ちになる。

(何でここにいるのかな……)

バカらしいと思うが、ついつい考えてしまういつもの疑問。

答えなんて、腐るほど有ると思うし、一つも無いと思う。

ぼんやり、そんなことを考えていたら、フッと何かが視界の端を横切った。

驚いて振り向くと、本棚の影に赤い布のようなものが一瞬見えたような気がした。

不思議に思い、椅子から立ち上がりそちらへ向かう。

本棚に近づき、裏側へ回り込もうと思った瞬間、肩に手を置かれた。

「――っ!!!?!」

反射的に手を振り払い後ろを振り向くと、目に映ったものは……。

(……誰?)

太陽のような笑顔の、深紅の瞳が綺麗な銀髪の青年だった。
服は赤い上着に真っ白なシャツ、黒いズボン。……長身によく似合っている。

顔もまた、整っていて、友達が見たら叫びそうなほど美形だった。

……でも、私は何よりも驚いたのは、耳。

ピアスがジャラジャラついているわけじゃない。

そんな生易しいものじゃなくて……。

(コレってウサギ耳?)

そう。銀髪によく似合う、白く長いウサギの耳が生えていたのだ。
もし、小さい女の子が遊園地とかでつけていたら可愛かったかもしれない。

でも、今ウサギ耳をつけているのは、高校生か大学生くらいの長身の美形な男な訳で。

……なんていうか、台無しだ。おかし過ぎる。場違いって言うか、それ以上に……。

——変質者にしか見えない。

何でこんな奇天烈な格好をしているのだろうか？
そもそも、何で学校の図書室にいるんだろう？
でもって、何でこっちの本棚の裏にいたはずなのに私の後ろに居るの？

瞬間移動？　もしかしてココの人？　え？　ちょっと、まって？
何がどうして……？

混乱する私の前で、振り払われた手をさすりながら、恭しくお辞儀をし変質者——じゃなくて（まだ決まった訳じゃないし）青年は挨拶を始めた。

「すみません。後ろからは流石に驚きますよね。大丈夫ですか？始めまして、僕らのアリス。僕は案内人の白ウサギです。

……って、え！？　ちよつと！！　アリス！？　何で逃げるんですか！？」

変質者だからです。とは言わない。そんな事言う前に逃げないと。図書室の出口に手をかけた時、後ろから小さなため息と大きな舌打ちが聞こえた。

「あー、もう。逃げるんですか？　逃がしませんよ、アリス。」

その言葉と同時に地面を軽く蹴る音が鼓膜に響く。

……やばい。追ってきた。てか何で？

「っ……はあっ、はあっ……」

どんどん息があがってくる。足がもつれて転びそうになる。

教室の角を曲がり階段を上ろうとした時に目の端に赤い上着が映った。

逃げるのに夢中で後ろを気にしなさ過ぎた。

（ヤバイッ……速いこの人！！！！）

そう思った瞬間、強い力で腕を引かれた。バランスを崩し、階段から足を踏み外して後ろに倒れる。

手すりを掴みそこね、そのまま勢いよく落ちる。

どうしようもなくなった私は硬く目を閉じ頭を打つことを覚悟した。

「……ん？」

……けど、いつまで待っても、想像した痛みはこない。

だけど……お腹の辺りに何か硬いものが押し当てられて……食い込んで？痛い。

恐る恐る目を開くと信じられない光景が目に入った。

変質者……じゃなくて青年……ああ、もーいいや。変質者が私を担ぎ上げて走っていた。

お腹が痛いのは、彼の肩が下にあるからだ。

「何死にそうな顔してるんですか？　アリス。……あつ、頭打つと思いましたか？」

アリスは痛いのは嫌いですか？　……安心してください。貴方を危険な目にあわせませんから。」

……痛いのが好きな人っているの？　てか、お腹痛い、痛いってば、肩どけて……。

私の思いが分かったのか、自分の肩辺りを見ると、にっこりと笑顔で

「アリスが逃げるのが悪いんです。しばらく我慢してくださいね。」

と言いつつ。　てか、我慢するって？　しばらくって？

「ちょっ……何処へ行く気!!?」

思わず大きな声で叫ぶと、不思議そうな顔をして彼は答えた。

「不思議の国ですよ。アリス。……忘れたんですか? 約束したじやありませんか……」

あっ……ああ、だから逃げたんですね? 相変わらず忘れっぽいです、アリスは」

……不思議の国!!? 何そのメルヘンな名前? 頭大丈夫!!?」

あまりにも当然そうに答えられるので、ツツコむ気も失せてしまった。

啞然とする私を無視して、どんどん階段を上る変質者。ちょっ、何処まで登る気? もう四階よ!!?

何処に行くのか尋ねようとしたとき、銀色のドアに手がかけられた。

四階でこんな無機質な銀色のドアと言えば……

——屋上だけ。

コイツ、屋上に行く気!!? どうして!!?

とりあえず手足をバタつかせるが、一向に私を担ぐ手の強さは弱まらない。

「…え、ちょ、放せ変質者!」

「変質っ!？ …ああ、もう。…何とでも言ってお下さい。さ、着きますよ。」

案の定、着いたのは屋上。抵抗もできぬまま、私を抱えた青年は、また走り出す。

数メートル走ったところで————不意に、体が軽くなった。

は？

そんな短い台詞すらも呟けないまま、銀色の見覚えのある柵が一瞬で上に消える。

次に目に映るのは、またしても見慣れた校舎の窓。やはりそれも、視界の上に消える。

……違う。私が、私達が落下していつてるんだ。

何故かって？ このウサギ耳を生やした変質者が飛び降りたからさ。————屋上から。

ジェットコースターが堕ちたときと似る浮遊感。

…私、アレ苦手なんだよね。

あまりにも急すぎて、考えることがおかしくなってきた。

死んだ目で笑う私に相変わらず笑顔で彼は言う。

「さあ僕らのアリス、一緒に堕ちましょう？ 不思議の国へ。

あ、そうそう、大きな声出さないでくださいね。煩いですから。」

……よし、まず一つは言いたいことがあるぞ。この変態野郎。

「冗談きついつてエエエエツツッ!」

気を失う寸前。ふと、最近読んだ本の内容を思い出した。

——追いかけるアリス。逃げるウサギ。

でも、コレって逆じゃ……。

——追いかけるウサギ。逃げるアリス。

そう、本当はこっちが正しい。

気づけば校舎は何処にも見えず。真っ暗な空間に私達は居た。

もう、どっちが上なのか下なのか、落ちているのか浮いているのか、よく分からなかった。

その後の記憶は、私は覚えていない。

さあ、アリス。僕は約束は守ったよ。今度は、君が約束を守る番だ。

コマもボードも用意した。後はサイコロを振るだけだ。

「さあ、私を迎えに来て***さん。そして狂わせて？」

———だって、約束でしょう？

『嘘ついたら針千本のーます。指切ったー!!』

僕と貴方で交わした約束。貴方はまだ覚えていますか？

さあ、いらっしやい。僕らのアリス。

ようこそ、不思議の国……夢の国。ワンダーランドへ。

ココは君のためだけの世界だよ。

……なのに、ココから出たいのかい？

なら、君の“大切なモノ”を探すことだね。

ほら、夢は始まったばかりだよ……？

『痛い、痛い、生きていたい。それでもココには居たくない』

『死にたくないなら、ほらコチラ。扉はもう、開かれた』

「んっ……？」

夢を見た。何かを持って泣きながら歩く女の子とその子に手を差し出す少年。

“大切なモノ”って何？ 探すってどういうこと……？

何処からが夢だったのだろう？ 学校の図書室で本を読んでいた
トコからか？

それとも、屋上から落ちたところ？ ……アレ、他に何か忘れて
……。

「……ス。…リス？ …アーリースう？ 大丈夫ですか？ あつ、もしかして死んじゃいましたか！？」
困りましたね……女王様に怒られるじゃないですか。生き返ってくださいよ……。アリスー？」

アリス？ 死んだって何？ 女王様？ 生き返る？ …ていうか誰の声？

重たい瞼を開けるとそこには心配そうな顔をした美形な青年……いや、ウサギ耳を生やした変質者がいた。

ああ、コイツを忘れていた。……そうだ、コイツに私は図書室で出会ったんだ。

それで、びっくりして逃げて……でも捕まって……それで……？

———私はコイツと屋上から落ちた。

「あっ！！ 良かったです、アリス。生きていましたね！ これで怒られないで済みます！！」

ああ、でも本当に良かった。アリスの直し方なんて僕は知らないの……」

安心したのか、また太陽のような笑顔で話し出す変質者。

お前が私を屋上から落としたんだろう。そう言おうとしてやっと私はおかしなことに気づいた。

「……何で生きてるの？」

「へ？ 何でって生きてるからに決まっているじゃないですか」

意味が分からない。言葉のキャッチボールがまるで成り立っていない。

そもそも、私が死んだら玩具のように直す気でいたのか？この男は……。

内心呆れながらも、立ち上がって辺りを見回す。

夕方で赤く染まっていた空は、眩しいほどに青く澄み切っている。もう夏なはずなのに、吹く風は涼しくまるで春のようだった。私が住んでいたところには絶対に無い、青々とした緑の草原。咲き乱れる見たことも無い花々。鮮やかな色の蝶。

明らかに私が住んでいたところではない何処かに私は今居るのだ。

そんな状況なのに、あまり焦りは感じなかった。

絶対に見覚えのない風景なのに、どこか懐かしい。……でもそんな事あるはずが無い。

「ココは何処？ 貴方は誰？」

とりあえずそう質問しておく。まずは現状把握が優先だ。

一瞬、私の質問に驚いた顔をした彼は、一拍ほど置いて納得したような顔になり答える。

「ああ、忘れてしまったんですね。なら、分からなくても仕方が無い。

落ちる前も言いましたが、ココは不思議の国ですよ。アリス。

それと、さっきは貴方が逃げてしまったので最後まで言えませんでした、

……はじめまして、僕らのアリス。僕は案内人の“白ウサギ”です。

」

そういうながら、腰を落として私と同じ目線にし微笑む。安心させようとしてくれるのだろうか？

思わず、自分も微笑み返そうとするが、寸前で止めた。変質者なのは変わりないのだ。

それに、そもそも、私は“分からない”のではなく“知らない”のだ。

なぜ、そんな言い回しをするのだろうか？ ……めんどくさい人だ。

……にしても、案内人の白ウサギ？ 名前は……白ウサギなの？ 愛称とかじゃなくて……？

「えっと……名前は？ ……無いの？」

つい気になったので、尋ねると悲しそうに笑いながら彼は答えた。

「本当に何も覚えていないんですね……。僕の名前はハクトです。白^{ハクト}に兎^トでハクトです。……貴方がつけてくれたんですよ？」

何を言っているの？ 貴方とは初対面……。　　そういおうとした瞬間、頭に激痛が走った。

「——っ!!?」

思わず頭を抱えて蹲る。あまりの痛みに目の前が暗くなりかけたとき、頭の中に映像が浮かんだ。

小学生くらいの少女と、少し年上の男の子が、青空の下を仲良く手を繋いで歩いている、そんな映像。

映像の中の少女は無邪気に笑いながら、少年に話しかける。

『ねえ、白ウサギさん。貴方名前は無いの?』

『名前、ですか……。僕の名前は“白ウサギ”ですよ』

少年の答えに不満を感じたのか、僅かに頬を膨らます少女。

『そうじゃなくて……。私みたいにアリスって名前。***じゃなくて』

『アリス。逆ですよ。***が貴方の本当の名前です』

『いいのよ。アリスが私の本当の名前なの。***なんて嫌よ』

きっぱり、言い切る少女に半ば諦めた口調で考える少年。

『そうですか……、なら僕にはありませんね』

『えー』

『えー、と言われましても……』

少女にブーイングを言われ、僅かに眉を下げ困る少年。

しかし、無いものは無いのだから仕方が無い。

すると、少女は考えるような仕草を暫くし、唐突に顔を上げ呟く。

『なら、私がつけてあげるわ』

『本当ですか？』

『ええ！ ちょっと待ってね……』

再び考えるような仕草をする少女を見ながら、嬉しくてたまらない、笑顔で少年は話す。

青空の下、笑う少年の顔はとても輝いている。

『アリスに名前を考えてもらえるなんて、僕は幸せです』

『ふふ、そう？』

幸せ、という少年の顔を見て、少女は眩しそうに目を細め子供らしからぬ大人びた笑顔を見せる。

そしてふと、思いついたかのように呟く。

『……ハクト』

『ハクト？』

あまりにも小さな呟きを聞き逃さなかった少年は言葉の意味が分からず聞き返す。

すると、微笑みながら少年も見て再度、同じ言葉を繰り返す。

『そう、ハクト。……白い兎だから。……どうかしら?』

少女の言葉に納得した表情をした後、素直に少年は思った事を口からこぼす。

『うわぁ……安直』

『何よ! 文句ある?』

気に入らなかったら……と、少女は心配したのだろう。

あまりにも意外な答えに顔を赤く染めて少女は叫ぶ。

そんな少女を優しく見つめながら、少年は笑う。

『アハハ、いいえ、そんな事……嬉しいです。大切にしますね』

幸せそうに、幸せそうに微笑む少年に満足したのか、少女も顔を綻ばせ笑う。

『そう? フフツツ、約束よ。絶対に大切にしてね』

その言葉を最後に、二人は青空の空の下、光に吸い込まれていった――。

「あっ……う、痛いッ……」

「……ッアリス!? 大丈夫ですか!! アリスッ!!」

蹲る私の肩に彼が手を置いた瞬間、嘘のように頭痛が引いた。
心配する彼の声を頭の隅で聞きながら、ぼんやりと私は思った。

（そうよ、私がつけたんじゃない。ハクトって……）

そう納得しかけた瞬間、ハッと正気に私は戻った。

「ちがうっ!!」

思わず大声で叫んでしまった。だって、そんな事、ある筈が無い。

知らない知らないっ!! 私には知らないッ!!

私はアリスなんかじゃない。私は、私は――――

「……私は、誰？」

名前が思い出せない。

そんなはずは無い。自分の名前が分からないわけ無い。

混乱して、ガタガタと震えだすそんな私の背中に手を回して、安心させるように、彼は言う。

「アリス、落ち着いて。大丈夫、大丈夫だよ」

今までの敬語は何処へ行ったのか、
ゆっくりと、静かに、優しい声で何度も何度も“大丈夫”と呟く。
しばらくして、落ち着きが戻った私に彼は続ける。

「アリス、貴方はアリスです」

違う。そう言いたかったが声が出なかった。
私はアリスなんだ。他に名前なんて無い。

「そう、君はアリスなんだよ」

「……そうね、私はアリスなのよ。何言ってたのかしら私」

落ち着きが戻った私を見て、ホツとする彼――ハクト。
なんで、この人はこんなに私を心配してくれるんだろう？
いくら、“白ウサギ”とはいえ、納得できない。

「？　どうかしましたか？　アリス」

少し見すぎただろうか？

不思議そうな顔で覗き込まれて、思わず顔を背けた。

「べ、別に……何も無い、です」

動揺しすぎたせいか、敬語口調になってしまう。
焦る私を見ると、面白そうに微笑む。

「変なアリスですね。……でも、そんな所も可愛いですよ」

「なっ…!？」

急に何を言い出すんだ、この人。

火が吹き出そうなほど顔が赤くなり熱くなったのが自分でも分かる。

本格的に動揺した私は、話を変えようと喋る。

「あっ、えっと……その、は……ハクト、さん？」

「ハクト、でいいですよ。僕らのアリス」

相変わらず微笑みながら答えるハクト。

そんな彼に、少し落ち着いた私は前々からの疑問をぶつける。

「その……“僕らのアリス”ってそういう意味？」

「そのまんまですよ」

案外、あっさりと返されてしまった。

「……なら、まだここに人がいるの？」

「ええ、沢山います。……それすらも覚えていないんですか？」

少し悲しそうな顔で、私の顔を覗き込む。

悲しそうに細められた青い瞳が潤んだような気がして、
少し罪悪感を感じながら、思ったことを伝える。

「……いや、覚えていないんじゃないかって、知らないのよ。そもそも」

「……落ちたときに忘れてしまったんでしょうか？」

「いや、その前からだと思うわ」

「どうでしょう？」

「私に聞かれても……」

「「……………」」

沈黙が痛い。

顎に手を添えて考える姿はカッコいいが……じゃなくて。

何言ってるんの私!?

この人、一応変質者の疑いが……あつ、そうよ! その耳はなん
なの!?! その耳は!!

「耳!?!」

ビシッ　と音がつきそうな勢いで私は彼の頭上を指差す。

「え？　ああ、コレですか？」

急に頭上を指差されたハクトは、しばらく驚いた顔をしていたが、すぐに納得のいった顔になって、私の指差したものを自分も指を差した。

太陽の光を受けて光る、銀髪の上の純白のウサギ耳。

時折、ピコピコ動くそれは、とても可愛らしい。……小さい子がつけていれば。

（本当に損なものを持ってるわよね……）

「それ……本物？」

「勿論ですよ」

彼は何を言っているのか分からない。という風な顔で首をかしげる。

その顔にはウソも冗談もなさそうだった。

（……本物なんだ）

しばらく絶句する私に、思い出したように、彼は言った。

「アリス、貴方は僕と始めてあったときも同じ事を言ったんですよ」

「へえ……」

そろそろ、自分が忘れてるだけのよう to 思えてきた。

さっきの映像といい……信憑性がある、と思う。

何か思い出さないと、そう思ったとき前よりも酷く頭痛がした。

「——ああっ!？」

今度こそ、目の前が暗くなる。

薄れる意識の中、倒れた私を抱き起こすハクトが

——少年に見えた。

そう、さっき見た映像のアノ少年に。

意識が完全に闇に飲まれる直前、誰かの声が聞こえた気がした。

「まだ、思い出したらいけないのに。いけないアリス」

悪夢登場

「……何処？　此処は……」

気づけば私は灰色の世界にいた。

地平線？　すらも見えない、果てしなく灰色な世界。

上を見ようが、下を見ようが、右を見ようが、左を見ようが、灰色。

いや、そもそも上下左右が存在するのか分からない。

手は…あった。足も、確認できる。

灰色の中に浮き彫りにされたかのような自分の身体は影が存在しなかった。

そもそも、影を作り出す光が無い。影が映る場所も無い。

しばらく周りを見渡していると上？　から声が聞こえてきた。

「お帰り、アリス」

突然のことに驚いて身体が固まって動けなくなる。
目だけを動かして声のしたほうを見る。

その方向にいたのは灰色の青年だった。

ハクトのように耳は無かった。　…人間？

灰色の少し長めの髪が後ろで縛られていて、長めの前髪が右目を隠している。

白いシャツに赤のリボン。黒のズボンと黒のブーツ。

かろうじて、見ることはできたけど、ほとんど灰色のロングコー

トに隠れていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4599u/>

夢の国のアリス

2011年11月16日20時10分発行